

LASA第13回国際大会に出席して(海外短信)

著者	石井 章
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	3
号	4
ページ	21-22
発行年	1986-12-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006709

LASA第13回国際大会に出席して

石井 章
(調査研究部)

LASA (米国ラテンアメリカ学会; Latin American Studies Association) は、社会科学部門を中心とした学際的なラテンアメリカ学会として1966年に設立された。もともと米国のラテンアメリカ学会であるが国外の者にも会員資格が与えられ、筆者も会員になっている。1年半ごとに国際大会 (International Congress) が開かれ、今回の第13回国際大会は創立20周年記念の大会となった。会議は1986年10月23日(木)から25日(土)までの3日間、ボストン、コモン・ベイ地区のパーク・プラザ・ホテルを会場に開催された。

大会での報告申し込みはこれまでの最高を記録したといわれるが、プログラムに載ったセッション数は、朝食会 (breakfast round-table) や公開集会等も含めて全部で251にのぼった。通常のセッションは朝8時から10時、10時15分から12時15分、午後1時15分から3時15分、3時半から5時の各時間帯に多数同時進行で行なわれ、びっしりとつまったスケジュールであった。当然のことながら同じ時間帯に聞きたい報告が複数あり、選択を迫られることになる。この他に朝7時から始まる朝食会にも魅力的なテーマが並んでおり、筆者も2日めの「ニカラグアにおける論争の両極化：対話は可能か」、3日めの「グアテマラおよび中南米における人種、階級、抑圧」という二つの朝食会に参加を申し入れておいたが、申し込みが遅かったため満員で参加できなかったのは残念であった。朝食会のテーマはこの他に「ラテンアメリカおよび米国における女性研究：比較的、学際的アプローチ」、「メキシコ-米国関係における国境問題」、「ペルーの経済：ガルシア政権の最初の15カ月」といったものがあつた。

会場のパーク・プラザ・ホテルの4階には客室はなく、大小21の会議室があるが、これら全部を

3日間LASAが借りきった。会場が一つのホテルの同じフロアーに集中しているため、移動のための時間的ロスは避けられる。3年前の1983年10月にメキシコ市で開催された第11回国際大会の会場は三つの異なった建物に分散しており、そのうち一つは主会場からタクシーで15分ほどの場所にあった不便さを考えると、今回の会場はその点たいへん便利であった。ただ朝8時から夕方5時すぎまでのセッションに熱心に出席していると、ボストンの街の散策はおろか、フィルムの上映や書籍の展示販売の方に顔を出す時間はおのずから制限される結果となった。

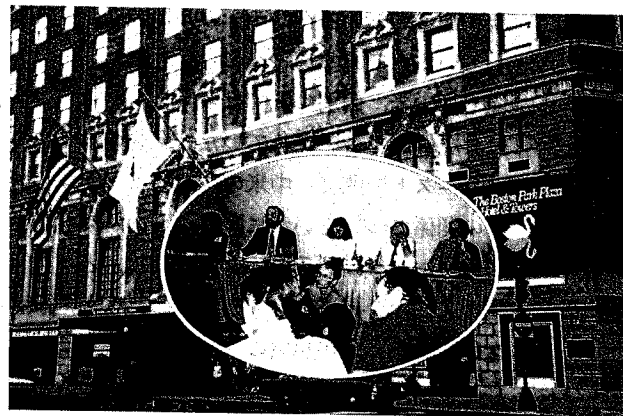
3日間に筆者が出席したセッション名を次にあげる。

「ニカラグアにおける民族集団の自治と国家」

「中米からの移民および難民」

「変貌するラテンアメリカの農業構造：原因および制度的対応 (そのⅠ), (そのⅡ)」

「ニカラグアと反革命」



会場のパーク・プラザ・ホテル。円内は、「中米の未来と米国の政策」セッション

「中米の未来と米国の政策」

「ラテンアメリカの農村民主化の展望」

「中米と中東：危機の国際化」

「ニカラグアにおける混合経済と変遷の過程」

「ニカラグアにおける政治思想と変革」

「エルサルバドルとニカラグア：相似と対照」

このように筆者の主たる関心に従って、中米に関するセッションと農業構造に関するセッションを選んで出席したが、この問題に限ってみても、同じ時間帯に他にも出席したいセッションが組まれており、いずれかを切り捨てなければならなかった。またこの種の会議にはよくあることだが、報告予定者や発表テーマが入れ替ったり、プログラムに載っているセッションでキャンセルになったものがいくつかあった。そのなかには「ニカラグアとエルサルバドルにおける和平の見通し：国内および国際的次元」、「中米・カリブにおける経済発展と社会変化」、「ニカラグアのカトリック教会に関するフォーラム」といったものがあった。この最後のものには、報告者としてマナグア管区大司教カルディナル・オバンド・ブラボの名があがっていただけに実現されずに残念であった。

今大会だけに限らず当学会の全般的傾向としていえることは、数あるセッションおよび報告のなかには歴史研究や文学に関するものもみられるが、現在起こっているクリティカルな問題が主流をなしている点である。とくに今大会については、地域では中米、個別の国ではニカラグアに関するものが圧倒的な数を占めていた。米国のラテンアメリカニストの間で、中米の危機的状況および米国との関係についていかに関心が高いかを示すものである。レーガン政権の対中米政策、とくにニカラグアへの介入に関して、地域研究者が危機感を抱いていることが熱気のこもった討論から窺われた。ちなみに「ニカラグアとの学者間の交流に関するLASAタスクフォース」という組織があって、ニュースレターを出したり集会を開くなどの活動を行なっている（キューバ、グアテマラ、人権問題等に関しても同様の組織がある）。前記「中米の未来と米国の政策」のセッションでは、予定さ

れていた研究報告が終わった後で、コーヒー農園主の夫をコントラ（反政府ゲリラ）に殺害されたというニカラグアの婦人がとくに発言を求められてそのときの状況を語った。

最後に、筆者が出席しなかったセッションのなかからいくつか題名を拾ってみよう。

「体制は違いをもたらすか？ 民主主義と権威主義のもとにおける公共政策」

「1973年以後のチリ社会の構造変化：民主化への展望」

「先住民族（インディヘナ）の眼から見たラテンアメリカの過去」

「ラウル・プレビッシュ（1901～86）とラテンアメリカ経済」

「セndero・ルミノソ運動：その起源、イデオロギー、支持基盤」

「対外債務と国内の貧困：長期的考察」

「最近の中米の選挙と民主化への展望」

「進歩的ラテンアメリカニスト組織および対カリブ・中米代替政策委員会（PACCA）の公開集会：ニカラグアと共に生きよう」

「制限された民主主義のジレンマ：アルゼンチン、ブラジル、メキシコにおける現在の危機への対照的な対応」

今大会の出席者数は2200名にものぼったが、米国内およびラテンアメリカからの出席者が多数を占め、期間中筆者が日本人にあったのはアジア経済研究所の柳原透派遣員（ニューヨーク駐在）1人だけであった。日本の大学関係者はこの時期に外へ出にくいためであろう。今後1年半ごとに開かれるLASA国際大会に当研究所から交替でだけか出席（できれば報告）することが望まれる。次期国際大会は1988年3月、ニューオルリーonzで開催が予定されている。

（いしい・あきら）